
なんでやねん

山田一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん

【NZコード】

N4944E

【作者名】

山田一

【あらすじ】

僕は思う。誰だって人生の主人公なんですよ。生きている限り毎日が舞台です。フィクションやファンタジーでは味わえない、一般人の普通のようで普通じゃないノンフィクション人間ドラマ。子供の頃の人間形成を経て大人になって恋愛を経験するハートフルストーリー？

幼少期？（前書き）

読みやすく笑いやすい、そんな作品です。大人になるまでは前振りです。

まずは幼少時代から。

幼少期？

高度経済成長の最期、1973年の第一次ベビーブームつて時代。いわゆる団塊一世。そんな中途半端な時代に生まれたんです。

貧乏盛りの学生結婚だった両親。男の子が出来て死ぬほど嬉しかった、と聞かされて育つたんですよ。子供の頃の記憶、それは小さな平屋建て長屋の狭い家で家族3人暮らし。つても記憶の中ではもう弟がいたけどね。だから4人。2歳以前の記憶なんて普通無いでしょ。

貧しくてもなんか気持ちは裕福。だって食えなかつたことなんてないし、いつも家族一緒に食卓囲んでたし。ちょっと怖いオヤジと元気が取り柄みたいなオフクロ。つてか普通ののどこにでもある家庭。ちょっと貧乏なだけ。でも幸せだった、それしか覚えてない。

両親共働きだからね。保育園に入園したんですよ。覚えてないけど。覚えてる事つて言えば、絵を描いて賞を貰つた事ぐらいかな。あと保育園の先生だつたおねえさんが、僕の叔父さんのお嫁さんになつた事ぐらい。すげー嬉しかつた。だって先生がショッちゅう家に遊びにくるんだもん。

僕が大人になつてから先生が「ちょっと変わつた子供だつた」と思い出したように言つんですけど。他とは違う、特殊な何かがあつたんだつて。なんじゃそりや、覚えてないつて。

全然覚えて無いことだらけの幼少期。でも、僕が高校に行く頃にオフクロと先生、つてかオバサンに僕の子供の頃の事をあらたまつて聞かされたんですよ。

あなたは変わつた子供だつた。保育園児なのに算数がスラスラできたし、大人の言葉がほぼ理解できた。頭の回転が異常に速く、家

族みんなで「神の子」やつて騒いだんよ。精神科医に連れて行って、知能検査もしたぐらいよ。それがこんな・・情けない・・。

なんでやねん、なぜ嘆く。僕は普通の子供だぜ？

少年期？（前書き）

当たり前のようになってしまった。

少年期？

小学校に入学した。貧乏人の親や祖母達が精一杯頑張ってくれたんだろう。ピカピカのランドセルとなんか恥ずかしいぐらいのお召し物。不細工な顔に天然パーマ。なんか写真とか一杯撮られてさ、恥ずかしいたらありやしない。でも覚えてるのはそのくらい。30代半ばまで覚えてる事つて少ないよね。

思い出せば習い事をたくさんさせられてた。貧乏人の子供なのに。体が弱かったので空手、頭が良さそうって勝手に決められて英語やそろばんやなんたらかんたら。どつかの金持ちのおぼっちゃんみたいじゃん。親たちは必死。こいつは大物になる、と自画自賛。すごいプレッシャーだね、僕。ちなみに知能指数は希に見る高水準だったらしい。何度も検査させられたもん。覚えてないけどね。

そんな気持ち知つてか知らずか。僕は普通に育つわけですよ。「やればできる」という自分を持ち、中途半端に生きていく。「やれば出来る」でもやらなきゃ出来ないんですよ。だからいつも成績は「ふつう」に「よくできる」がちょうどよろ。もちろん「がんばろう」も時々現れる。まあ際だって良くもなく悪くもない。

延々書いてるけど、普通なんですよね結局。当たり前の小学生、当たり前の子供。石を投げれば誰かに当たる、そんな子供でした。でもね、この頃の事が今の僕の人格を形成したんでしょうね。

まあそれが例え小学生つたつて、自分の事は理解してたつもりだった。際だって男前でもなく、才能あるスポーツマンでもない。もちろんモテモテのかっこいい男子じゃない。それぐらいのことはわかつてた。平凡平凡。何が悪い？

でも友達はやたら多かった。いじめられっ子もいじめっ子も、暗

い奴も不良も。どつちつかずの八方美人と言われてても気にしない。人を好きになる事はあっても、嫌いになるって事はあんまりなかつた。これは今でもそう。ただ、女の子は苦手だった。これも今でもそう。

女の子にやたら優しかった。だって自分は「不細工で取り柄の無い男子」ってわかつてたから。優しくするしか出来ないからね。格好つけることもできないし、もちろん「好き」って言われる事も無かった。でも別に気にはしなかった。仕方ないことだもんね。

何も考えずただ毎日過ごしてた。だって子供だもん。子供の頃から夢に向かつて一直線！って入る？いたとすれば、それは自分で考えそして思つただけじゃなく、親の希望や夢つてのが影響してるよね。

僕の子供の頃の夢？世界征服。なんでやねん。

成長期？（前書き）

小学生高学年。初恋？しました。

成長期？

小学生も高学年になると、少し色気づいてくるんですよ。髪型だつたり、服装だつたり。今までは母親が買ってきました服を文句も言わず着ていたんですけど、連れて行つてもらつてスーパー・マーケットで自分で選ぶようになつたりしてね。鏡も見るようになつたし。平成の子供達よりは少し遅いかもしないけど、何か用覚めるんですよ。

もちろん悪いことも覚えた。盗んだり吸つたり飲んだり。でもそれも特別悪かつたって事じやない。誰もが通る道、そんな普通のようだ。

貧しかつたとかそんな事じやない。親は貧しくても何でも与えてくれた。ただ、周りに流されただけ。不満や葛藤もあつたかもしれない。でもそんなことじやない。一通りの事を当たり前のようにしてしまつただけ。何もなかつた子供の頃。ただ流されるだけの少年時代。

この頃初めて好きな女の子ができた。一緒にクラスの女の子。人気者で男子に好かれ女子に嫌われるタイプ。本当に好きだつたかな？みんなが好きだから僕も好きになつたんかな？ただその子とは普通に話せた。だって女子が苦手だったもん。小学生の頃の「好き」つてただ相手にその意志を伝えるだけのシンプルなものですね。

「お前アソツのこと好きやー」と。ただそれだけ。

そんな流れで交換日記とか始めた。好きだつた女の子と。「なんで僕？」なんて思いながら毎日色々な事書いた。向こうも好きつて言つてくれた。でもいつまでもコンプレックスが拭えない僕は信じてなかつた。だって僕なんかダメダメ、普通の子供だもん。

ただ「お弁当が食べたい」って理由で課外活動も始めた。少年バスケットボール。仲の良かつた友達に勧められて、ただ流されて始めただけ。楽しかったが、さして上手な訳でもなくただバスケットしていた、つてこと。ただ、その少年チームは強かった。だから僕もオマケで選抜に選ばれた。

なんでやねん。もっと上手い奴いいっぱいいるやん。

小さな大人？（前書き）

中学時代前半ですね。

小さな大人？

中学に入ると自我に目覚めていく。と言つても不良になるわけじゃない。周りの友達や先輩は街に名前を轟かす不良達だつたけど僕には関係ない。入学式、いきなり地元の先輩に呼び出され廊下をパンツ一丁で走つた。虐められたわけじゃない。なにか凄いすがすがしい気分だつた事を覚えてる。これがきっかけで自分の中で何かが弾けた。

流されるままバスケ部に入り、そのまま目標もなくバスケを始めた。最初の頃は「選抜」つてだけで体育館練習だつたが、すぐに自分が死んでる事を指摘されグラウンド組に放り出された。スポーツマンになりたかつたわけじゃない。だつて特に優れた運動神経つて訳じやなく、まあ空手も続けてたしね。どうでもよかつた。ただバスケ部に入つただけ、そんな感じ。

当然のように成績は上がらない。親たちはこの頃から僕への期待を捨てたと思う。神の子と騒がれ知能指数が常軌を逸していた天才少年。その影は全く無し。普通のどこにでもいる落ちこぼれ寸前の子供。クラブを辞めなかつた事が唯一の救い。

もちろん恋なんて僕には関係ない。小学生の時好きだつた子は違う私立の中学に行つてしまつた。もう恋なんてしないつてのじゃなく、恋とは関係ない世界に住んでいた。そんな感じ。好きな子も出来ず、勉強もクラブも楽しかつた訳でもない。悪者の先輩達に連れ回され、楽しい世界を教えてもらつていた。でも悪者にさえなれなかつた。

親はこの頃からバブルの恩恵を受ける。貧しさを経験してこの世代の人間は本当に強い。我が家も平屋の長屋から三階建ての家に。

家に階段が付いたときの感動は今でも覚えてる。自分の部屋、自分のテレビ。そしてお小遣い。そんな忙しい中でも僕の親は必ず一緒にご飯を食べてくれた。幸せな家庭、家族。その中で中途半端な自分が凄く嫌だった。

田立ちたがり屋の中途半端な僕。1学年20クラスもあるマンモス中学なのに、3年間同じ先生が担任だった。新任の教師。入学式にパンツ一丁で廊下を走った問題児を離せなかつたんだと思う。そして3年生の頃、その先生に「生徒会を仕切れ」と言われた。

なんでやねん。僕が生徒会?天才メガネ君にやつてもうえよ。

初恋？（前書き）

中学生後半かな。

初恋？

あまりにもマンモス中学だったので、僕が2年の時に分校ができた。そして新しい校舎に僕は移った。一番に落書きして、先生に思いつきり殴られた。その熱い拳はいまでも覚えてる、って青春ドラマは無い。3年になつて初めて好きな女の子ができた。小学生の時にも好きな子はいたが、そんなんじゃない。胸が張り裂けるってのはこういうことなんだ、つてのを覚えた。

ダラダラと続けていたクラブ活動。さすがに3年ともなると多少は本気。6人しかいない3年生。バスケは5人、補欠は僕1人。情けなかつたね。仕方ないか、中途半端だつたもん。でも好きな子がずっとそこにいたから休まなかつた。彼女は女子バスケのキャプテン。だから僕は毎日クラブに行つた。コンプレックスマンだつたら気持ちは伝えなかつたけど、見てるだけで幸せだつた。これが初恋、自分で覚えてるリアルな恋。

「この学校は新設校だ。お前が一番に仕切つてやれ」と担任に言われた。まあどうでも良かつたが立候補してやつたんだよ、生徒会長。するともう一人立候補が。小学校からの仲間で学校一のモテ男だつた奴。同じバスケ部のキャプテン。なんでやねん、邪魔すんなよ。仲間だろ？

僕は選挙を待たず身を引いた。勝てるわけない、そう思つたから。「やつてみなきやわからん！」と担任は怒つたが、中途半端な僕は身を引いた。こつちはお笑いキャラ、あつちはイケメン。惨敗は目に見えていた。友達は「選挙にならんからお前も立候補しろつていわれたぜ」みたいな事を言つてやがるが、その勝ち誇つた顔が妙に腹が立つ。でも人を嫌いになれない僕は「じゃお前生徒会長やれよ」と言つて笑いながら身を引いた。

先生は泣きながら僕を殴った。お前を男にしたかった、そう言って殴つた。なんでやねん、俺だって辛いんだよ、マジで。

俺？（前書き）

中学最盛期かな？

結局体育委員長つてのに落ち着いた。生徒会長はイケメン君。まあ仲は良かったんでそれはそれで楽しかったよ。だってクラブも生徒会も一緒だし。つてか生徒会 자체がほとんどバスケ部だったし。なんでやねん。

初恋ちゃんとは3年になつて同じクラスになつた。もう大興奮。でも絶対バレちゃダメだつて思つてた。バレたらその子が可愛そーやん。冷やかされたりしてさ。なんで気を遣うんやろ。甘いよね僕。好きな人に好きって伝えられない、それがつらかった。もつと男前に生まれてくれば・・つて思つた事もあつた。でもそれつて間違いだよね。気づいたのは大人になつてからだけど。中学ぐらいの時は他の原因なんて考えなかつた。ただ好きだつた。

とある友人からその子が学習塾に行つてゐるという情報を仕入れた。速攻で入学した。頭のレベルは遙かにその子が上。けどそんなの関係ねえ。好きなら成せる、間違いない。僕はすぐにその子のいるレベルの教室に入った。猛勉強したよなあ。恋すれば出来るもんだな。だつて一緒に高校行きたかったから。「絶対女子校いくなよ!」がその頃の口癖。その子に「なんで?」「つて言われても・・・なんて答えてたんだり。思い出せないよ。

学習塾行くために習い事は全部やめてた。唯一続けてたのが空手。空手の先生怖かつたから・・辞めなかつた。ただ何となく続けてた。そんな感じ。でもね、僕にもチャンスが来たんですよ。地元の都道府県の大会で優勝してしまつたんですよ。こりや大変だ。平成の世の中では「空手」つてのは格好いいよね。格闘技ブームだし。でもその頃はそもそも無かつたんですよ。汗臭いし、なんか違うよね。スマッシュブームだもん。格闘技なんてダサイよね。だから

学校の友達には言えなかつた。空手で全国大会。今思えば言つとけば良かつたな。

そして全国大会へ。場所は日本武道館！キャンディーズだぜ？光
ゲンジだぜ？中途半端な僕が輝くチャンス！地元からたくさん応援
団が来てさ、横断幕とかあるわけよ。親は「やつと芽が出た。やつ
ぱりこの子は神の子よー」と大喜び。

なんでやねん。期待してたのは頭脳じやねーの？

早春？（前書き）

中学生ラストかな？

全日本空手道全国大会。格好いいよね。僕も都道府県代表ですよ。道着には地元の名前が刺繡してある。負ける事なんて考えて無かつた。親たちは騒ぎ先生は気合い入りまくり。僕も精一杯の気合いで戦いの場へ。つてあら、相手ほんとに中学生？ローランドゴリラじやん。強烈な目付きで睨んでるよ。超ヤンキーじゃん。なんかデケエし。中学生でも体重別にしてくれよ、殺されちやうよ、マジで。ヤクザ、ゴリラ対中途半端な僕。結果はわかるよね。

東京から帰つてさ、学校に行くともうその噂が教室に広がってるのね。「あいつ空手で全国一回戦負けだつてさ。ダセー」とか言われてさ。落ち込むつてば、やめてくれよ。空手の先生や親たちにもがっかりさせたのに。身長160台で極道、ゴリラに勝てるわけねえよ。お前ら何もわかつてないくせに。

泣きたかったけど、泣けないんですね。キャラじやないし。「いやー、全国は広いわ」なんて言つてさ。ヘラヘラ笑うのが精一杯。本当は一番悔しいんは僕だぜ？つーか僕が空手やつてたなんてお前ら知らなかつたる。誰にも言わなかつたんだから。担任教師が「あいつは今、全国大会で戦つてる」なんて言いふらしやがつたからバレたんじゃねえか。俺は職員室行つて先生にしがみつき、思いっきり泣いたよ。悔しくてどうしたらいいかわからんくて。先生に殴られた。「負けて知るものつてあるんじゃないか？」つてね。その時はわかんなかったけど、今じゃわかるよ、先生。

夕方、バスケット部の活動に出るのがイヤで校舎の影で1人で座つた。なんもやる気がしなくて。親もがっかりさせたから家にも帰りたくない。しばらく親と話するのイヤだつたし。んならね、僕の

大好きな子がそこに来たんですよ。なぜかわからないけど。校舎の影に。

「すうじいよねー。全国?じゃ地元で一番やん?」

つて話しかけてきた。「え・・?まあそうだけど」みたいな会話。でも僕はたまらなかつた。嬉しさと恥ずかしさ。なんかそこに座つてウジウジしてゐ自分がまた嫌いになつた。もちろん今まで会話はしたことがあるけど、二人つきりつてのは無かつた気がする。ヤバイよ、これ。

なんか色々話し込んだ。たわいもない会話だつたような気がするけどね。覚えてないわ。覚えてるのは、バスケ部の仲間がその子に僕を元気づけてくれつて頼んだこと。そしてそれを快く了承してくれたその子。そんなことは後から知るのだが、その時はすごく輝いて見たね。マジ天使。絶対僕をバカにしない、素晴らしい女性。泣きそうになつたけど、頑張つて耐えたよ、僕。

つてかなんでやねん、みんな知ってるの?僕がその子好きだつて事。

ねね~（泣き声）

やっと高校入りました。

おお？

中学の卒業式。がんばった甲斐があつたもんね。大好きな子と同じ高校！地元の公立高校に合格したんですよ。バスケ部のみんなはバスケの強豪校へ行つてしまつたけど、僕にとつてはバスケなんてどうでもよかつた。その子と同じ高校へ行きたかったから。高校行つたら告白する！不細工だけど、男前じゃないけど言つてみなきやわからんもんね。

高校へ行き、クラス発表。知らない奴ばかり。当然の「」とく好きな子とは違うクラス。なんか僕、勉強しすぎて頭のいいクラスに入れられてしまつたんですよ。おいちょつと待てよ、そんなんいらんからあの子と同じクラスしてくれよ。クソッタレ！

高校入つてもまたバスケ部。だつてあの子が「男子バスケ部のマネージャーする」って言つから。同じ中学は僕だけ！やつたぜ！僕の高校生活はバラ色じやん。ってかずつと同じ子を好きな僕つてオカシイかな。なんて思つたりしてね。

高校入ると、意外と女子から話しかけてもらつ機会が増えた。目立つキャラだもんね。生まれて初めて「付き合つて」って言われたよ。でも僕には「付き合つ」の意味がわからない。だつて女子に興味が無いから。ただ1人を除いて。「付き合つて何？どうしたらしいの？」って真剣に答えたのを覚えてる。

んで女子にコンプレックスがある僕は、付き合つてと言われて断る術を知らない。だつて断つたらかわいそうじやん。僕なんて「好き」さえ言えない情けない男。付き合つて、というには凄い勇気がいることだと思ってたし。「え、僕でいいの？」ってな感じ。「で、どうする？」「ってな具合。バカですよね。

同じクラスの友人。今でも親友。こいつは入学してから「お前の好きなのはあの子か?」ってずっと応援してくれてた友人。イイ奴だ。僕はクラブ活動以外はずっとそいつと一緒にいた。いつも「お前、好きでもない女から告られたら断れよ!なんであんなブサイクやねん!」って言われて怒られてた。「断つたら悪いやん」と言うと「じゃあフランなよ、あんなブスに!」ってまた怒る。僕は適当に断れないから、いつも女の子の方がすぐに飽きて向こうから「別れて」って言つてくるんですよ。んで「はあ、わかった」って感じ。

なんでもやねん、付き合ひつて何?

ねえ？（後書き）

まだまだ続きます。

マジ? (前書き)

初告白です。

マジ？

いろんな女子とふれあう事によって自分が磨かれていくのってこの頃なんですよ。今の高校生の子供達はマセてるとか性が乱れてるとか言うけれど、それはそれで良いんじゃないですかね。色々なモノを失いそして得る事は大事ですからね。ただ、僕たちの頃はもつと性というものに対する大人しかったように思う。僕だけ？

高校一年の時、また空手の大会で優勝したんです。二年連続都道府県代表！僕すげー。すぐにマネージャーに報告。マネージャーってのはもちろんあの子です。

「俺今年も東京いくんだ。い、い、い、一緒に応援しに来てくれるかい？」

これが生まれて初めての告白。ダサい。格好悪い。当然「学校あるから・・・」って断られた。そりやそうだよ。誰がいきなりそんなこと言つてついてくる？バカか僕は。でも一步踏み出した。あの中学の時の校舎の影。この子だけが知つて、僕の悩み。ただそれを言いたかつただけかも知れない。

「頑張ってね。応援してるよ！」最高、この言葉だけで空飛べる。すでに日本一になった気分。「去年の悔しさ、返ってきてね」だつてさ。今いるか？こんな子。いねえだろ。この子を好きで良かった。人を好きになるつていいよね。なんか色んな女子と知り合つたけど、他の子はただの人間。女は顔じゃない、心ですよ。まあこの子は顔も抜群なんですけどね。

「バスケ部には休むつて言つて」と言い、僕は再び全国の舞台へ。今度は代々木体育館。去年のかりを返すべく、弱く情けなかつた自分に別れを告げるべく僕はその舞台に立つた。中学の先生に

電話をし「先生、俺取り戻しにいくわ」と告げる。応援団は半減、親さえこねえ。気が楽だよその方が。もうここでの弱かった自分にサヨナラだ。んで試合が始まった時、僕は相手を殺し屋の目付きで睨み付け、心の中で呟いた。

なんでやねん、なんで黒人やねん。んなアホな。

マジ？（後書き）

まだまだ続きます

あーあ？（前書き）

高校一年かな。
忘れられない一瞬。

あーあ？

まあ一年連続一回戦負けなんですねけどね。つーか大会役員、わざとだろ。だいたい空手の全国に来る奴ってのは「ゴツイ野郎ばかり。僕みたいなスマートな奴なんているわけないし。格好悪いよ僕。もう穴があいたら入りたい、ってか過去の自分を埋め殺したい。

結局その後空手を辞め、バスケ部一本に。強豪中学出身は僕だけだったから結構優遇されても。だって中学の仲間はみんな有名校にいつしまったし。でもね、すぐにバレるんですよ。目が死んでる事。何やっても中途半端。終わってるよね僕。中学の時みたいな熱い教師もいないし、ただ惰性で学校行つて出席取つて。ただあの子に会えるからクラブ行つてた。そんな感じ。情けないったらこの上ない。この頃になるとみんな夢とか目標持ち出すよね。僕には無かつた。本当に惰性で生きてた。

一年になると、僕の親友君が僕の好きな子と同じクラスになつたんですよ。僕は違うクラスだつたけどね。「俺に任せろ。必ずお前らを引っ付けてやるから」大きなお世話だよバカ。こっちは何年も片思いなんだよ。自分で頑張るから放つておいてくれつて。でもね、その友達の言葉は今でも覚えてる。期待はしてなかつたけど嬉しかった。「モテない」と思つこんでるマイナス思考の僕にとって、頼もしい友人ですよ。

色々な女の子と友達になり、どんどん意識し自分が磨かれていく。この頃が一番そういう時期かもしないよね。相変わらず女の子が苦手で優しく接することしか出来ない僕。幼い頃からのコンプレックスは30代になった今でも続いている。当然この頃もそう。「お前あんなバイキンと喋んじゃねえよ」とか言われても気にしない。だ

からそういう虚められてたり目立たない女の子から人気あつたかも。全然気にもしてなかたけど。だつて好きな人いるしね。

で、一年になつて、その僕の友人君が僕の好きな子とすぐに付き合つたつて聞かされた。

なんでやねん。なんでやねん。

あーあ？（後書き）

続くぞー

マジですか？（前書き）

さて、お付き合いする人が出来ました。

マジですか？

僕の恋は終わりました。思い続けて数年。友人がその子と付き合つたって事より、何も出来なかつた自分に無性に腹が立つ。友達とはその後疎らなくなりました。もちろんその子とも。別にお互い避けてる訳じやない。もちろん「おめでとう!」って気持ちもある。だつて大事な友達が、僕の知つてる一番素敵な女の子と付き合つたんですよ?良いことじやないですか。

結局「好き」って気持ちだけじゃダメなんです。その好きって気持ちを力にして自分を磨き、そしてその好きって気持ちを全部伝える。それでフランクたつて「やるべき事はやつた」って思えるんじやないかな。なにもせずただ見てるだけ。それで「何かを失つた」なんて思つてる自分が死ぬほどイヤだつた。好きな子を取られた?ことよりもそれが辛かつた。

結局自分はそつだつたんですよ。子供の頃から中途半端。何もせつただ平凡に過ごす。親に甘え、夢も持たずただ日々楽に生きることだけを知らず知らずのうちに選んでた。これは今の自分にも言えること。この高校生の頃にその性格が治せてたら・・・なんて今でも思う。でもその頃は治せなかつた。未熟だつたし、スネる事しかできなかつた。たかが失恋。だれでも一度は経験すること。失恋を経験したことがないつて人は勿体ないよね。だつて凄い成長するんですよ、自分が。その気になれば、の話だけどね。

僕もその後同じクラスの女の子と付き合つた。もちろん好きだから。この時は自分から告白した。「あの子」が無理になつたからとかじやない。そんなこと思いたくもない。でも周りからみたらそう見えたんじやないかな。格好悪い、僕。でもあの事があつたから、

多少は変わったかもしない。だつて積極的な自分がいるんですよ？僕は精一杯お付き合いした。だつて優しくすることしか出来ないから。僕の告白を受け入れてくれるなんて。そんな女性を泣かすなんて考えられない。だから精一杯がんばった。

なんでやん。なんで僕はこうなんだ。

マジですか？（後書き）

続けます。

恋愛小説？（前書き）

なんか恋愛語りであります。

恋愛の形ってそれぞれ。全ての恋愛がドラマだし、例えそれが一夜だけの恋だつたりしてもそれはそれで恋愛の形。テレビドラマでは語れない、それその人の恋。100人いれば100通り、いやそれ以上の恋の形がある。だから恋は面白い。辛いのも楽しいのも恋。だから恋つて面白い。こんな中途半端な僕でもたくさん恋を経験したつもり。

高校一年の時に付き合つた彼女。彼女自身も長続きするなんて思つてもいなかつただうつし僕も思つていなかつた。ただ楽しかつた事は今でも覚えてる。その子の言つことは何でも聞いた。家の方向全然違うのに毎日一緒に帰つた。当時僕は「オートバイレーサーで世界征服」とか言いながらバイク乗つてたんですよ。いわゆる高校生サーキットレーサー。でも彼女が「危ないから辞めて」と言つただけでスッパリ辞めちゃいました。結構期待されてたんですけどね。つてそれくらい彼女にのめり込みました。なぜかわからないけど。

だつてまともに女の子とお付き合いするなんて、昔の僕じゃ考えられなかつた。中途半端で格好悪い、女の子と一緒に歩くだけでその子に悪いと思つてたぐらじのコンプレックスの固まり、コンプレックスマシーン。そんな一途で頑張る僕に彼女は誠意を感じてくれてたんかな。お互いにいいお付き合いが出来てた。「別れる」なんてことなんて考えた事もなかつた。

当たり前ですよね。誰だつて「別れ」を考えながら恋愛なんではないはず。考へるとすれば、それは精一杯できてない証拠。自分がどう思われるかどうかなんといいんですよ。まずはこっちが全てをやらなければおのずと伝わる。

恋は奪つるもの、愛は与え続けるもの。

相手の気持ちをしつかり奪うんです。自分の気持ちをしつかり与えて。それで奪えないなら、それは恋にも到達していない。ただのお気に入りですよね。そして相手の気持ちを奪えたら自分の全てを与える。少しずつでもいい、与え続けてこそ愛。これをすべてひとつくるめて恋愛。そんなんですよね。この頃そういう事がわかつてたら・・・。

なんぢやねん。もつ遅いよ。

恋愛小説？（後書き）

続きを読ま。

大人？（前書き）

そろそろ大人になつてきました。

大人？

高校を卒業して、僕は違う街に学生として行つた。高校二年から付き合つてた彼女とはまだ続いてる。「卒業したら別れるつて思つてた」なんて言つてるが、僕には意味がわからない。だって僕は女性に対して「嫌いになる」とかそういう感情が無い人間。自分のことを好きでいてくれたらそれでいい。自分から嫌いになるなんて絶対ない。子供の頃からそれだけは変わつてない。

僕も男。この頃になれば他の女性に目が移ることも多少はあつた。でもね、恋人つてのはまた別。だって一緒にいるのがあたりまえじやん。ケンカしたら仲直りすればいい。嫌なことがあつたら注意すればいい。それだけのこと。そんなこともできないなら、最初から付き合わなければいい。僕はそういう感覚。だから18歳にしてこの子との未来を考えた。それは恋愛うつづじやなく、当たり前のこととして。何よりも大事、何よりも素敵。そんな感じで僕は生きてた。

厳しい家の育ちだつた彼女。僕が違う街にいた2年間で泊まりに来たことは一度だけ。やばいよね、純愛ですよ。僕は彼女に「お泊まりだよ。何がしたい?」と尋ねた。すると彼女は「深夜のコンビニに一人で行きたい」だつてさ。そんなちっぽけな願い。すぐ叶う願い。でもね、那些細な瞬間を喜べる二人だつたんですよ。

恋愛つてのは得てしてマンネリになるもの。誰だつてなるよ。同じ人とずっと一緒だもん。当たり前じゃないですか。でもね、そのマンネリを楽しまなくつちゃ。だつて相手がいなけりやマンネリもクソもないんですよ?僕は幸せでした。こんな素直な子が僕みたいなどうしようもない男を好きでいてくれてるんですから。でもね、

僕は心のどこかでいつも感じたことがあるんですよ。「なぜ僕はこんな人間なんだ」って。

人を好きになることもできた。人に好きって言つて貰えるようにもなつた。でもね。まだ僕は中途半端なんですよ。子供の頃からずつと離れない、僕のコンプレックス。中途半端な僕。何に満たされ何に幸せを感じ、何をすればいいのかわからない。それが恋愛であつても。ただ目の前の人を「好き」と思おうとしてただけなのかもしれない。

なんでやねん、コイツが最高の女じょん。

大人？（後書き）

続けていいですか？

結婚？（前書き）

さて、そろそろ本編ですかね。

だらだらと25歳になった。高校の時からの彼女とはまだ続いている。ケンカは絶えなかつたけどね。でも彼女がいるから僕がいる、つて思いに変わりはなかつた。でも他の女性が嫌いなわけじゃない。つていうか浮気つての？はそれなりにした。昔から女性が苦手で、自分を「不細工」という言葉で片付けてきた自分。だから近づいてくる女性は誰も逃したくなかった。だってこんな僕の事好きつて言ってくれるんですよ？

いつしか汚い駆け引きも覚えた。騙すつもりなんてない。だっていつも一番に言うもん。「彼女がいます」って。それでも遊んだ。自分を待つてる人の事など考えず。幼き頃、女性を苦手としていた反発かな。もうそこら中で遊びまくつた。自分はモテる、なんて勘違いもしたこともあるぐらい。女の子に「優しいね」と言われるたびに胸が痛んだ。だつて僕にはそれしかないから。それだけしかないんだから。かつこいいねと言われたことは一度もない。それは今でもかわらない。

そして。そんなバカな自分がまたイヤになつた。何も成長していない。子供の頃から何も変わつてない。夢も持たずただ遊ぶ金ほしさに働き、そして彼女との時間をつくる。隙間を狙つては他の女性と遊ぶ。女性と遊ぶ事によつて昔の自分を捨てようと思つてたのかもしぬれない。何も変わらないのにね、そんなことしたつて。

そんな自分と決別するため、結婚することにした。

結婚して家族を持ち、責任を負いそしてやつと過去の自分にお別れしようとしたのかもしれない。するによね。恋愛と自分のコンプレ

ツクス解消を「じちや」混ぜにしてる。もちろん相手の気持ちも考えたが、結局自分の事ばかり考えてた。結婚すれば自分が変わり、過去のコンプレックスを捨てられそして新しくなれると思つてたのかかもしれないね。

なんでもやねん、相手の気持ちを考えるよ。

結婚？（後書き）

次からが僕の本編です。たぶん。

また恋愛？（前書き）

さて、これからが本番です。

また恋愛？

25歳の春、彼女に言った。「結婚しようか」とて。彼女泣いて喜んでくれた。17の時から付き合つてたのでもう8年。さすがにそろそろだよね。少し訳ありで裕福ではなく、怖い父がいつも目を光させていた彼女の家。だから彼女は家を出ることを喜び、そして僕と一緒にすることを望んでくれた。いつも中途半端な僕の心。でもこれで僕も一人前になれるかもって思つてた。家族を持つことの责任感つてのを感じたかった。でも結局自分の事ばかり考えてたのかもしれない。コンプレックスを抜け出すつてことに。

そして話は順調に進んでいく。両親への紹介挨拶も済まし式場も決めた。新居も探している。結納や指輪、様々な新しい環境が周りを囲み出した。自分から結婚しようつて言い出したくせに、あまりの周りの変化に戸惑つてしまつ。そんな中途半端な僕について試練の時がきたんですね。

友人の姉が、「ご飯行こう」つて誘つてきたんですよ。なんかコンパがドタキヤンになつたらしく、後輩の女の子と3人いるから来い、とのこと。ハア？つて感じだけど、これまた女性からの誘いが断れない僕はノコノコ出行つたんですね。何もない居酒屋。女性3人と僕1人。なんか嬉しいような緊張するような。

そこに行くと友達の姉がいて、二コ二コしながら他の子を紹介してくれた。1人はツンケンしてる愛想の無い子。もう1人は二コ二コして愛想の良い子。僕は「こんばんわ」と当たり障り無く会話。だって苦手だし、こういうの。コンパとかなら騒げるし、どっちかと言うと盛り上げ役だからね。でもさすがに3対1はつらいよ。

じばりへ話してた。僕がもうすぐ結婚することやべだらない世間話など。軽快なトークとほどよい緊張感。なんか楽しかつた。その時のこととはっきり覚えてる。でもね、その途中で気づいたんですよ。シンケンした愛想のない子。その子が僕が中学から好きだった子に似てるって事にね。ほとんど喋ってくれないけど、顔や雰囲気は似てる。ってかタイプ。うわー、ヤバイ。カワイイよね。

ツンケンしながらもだんだん打ち解けてくれる。僕の無駄に低姿勢な姿も好印象だったのかもしれない。低姿勢？女性が苦手なだけだぜ。くそー、僕つていつまでたつてもダメだなあ。ってか結婚前に他の子気に入っちゃダメじゃん。ダメダメ、そう言つとこが僕のダメな所なんですよ。でもそんな少しの時間でも何か感情が沸いてきた。

なんでもやねん、俺もうすぐ結婚するんやで。

また恋愛？（後書き）

続きます。僕が死ぬまで。

アーリー・（前書き）

さて、相変わらず中途半端です。

彼女と結婚の事を進めながらも、僕はその子に夢中になつた。こんなタイプは初めて見た、つて感じの女の子。綺麗な顔立ちしてて凄い男性からモテてるらしい。だから初めて会つた僕なんかと喋る気にはならなかつたんでしょうね。でも僕は「うひょ、いい女！」なんてがつついたりしなかつた。だつて僕なんかがこんないい女性と釣り合うなんて思わなかつたし。初めて会つた時は連絡先なんて交換しなかつた。そんなこと出来るわけないし。

でも日が経つことに思いがつのる。ヤバイね、恋してるよ。

もうすぐ結婚。年が明けたら挙式。僕のこんな中途半端な気持ちを知るわけもない婚約者。毎日楽しそうに色々な事決めたりしてる。でも僕の中にはあの子がどつかにいる。うわー、ダメダメじゃん。男失格だよ。婚約者がいながらそんなこと考えたりしてたらさ。最低じゃん。

とある日。友達から電話がなり「今コンパしてるからお前も来い。絶対来い！」と呼び出されたんです。誘われたら断れない僕はまたノコノコとその場所へ。そこで驚いたのは、気になるあの子がそこにいた事です。「びっくりしたやるー」って。おいおいどういうことやねん。僕の友達が色々コンパの打ち合わせをしているうちに、共通の知人として僕が浮上。んで呼び出されたつて事。女の子は後から僕が来るのを知つていたそうです。

凄い舞い上がつた。もう飛び上がつた。コンパっていう特殊な盛り上がりの中、やっと連絡先を聞くことが出来た。聞いてどうするん？結婚するんでしょ？また中途半端な僕。ダメダメです、いつまで

たつても。そして急にその女の子が僕にプレゼントをくれた。なんで？なんで？初めて会った時、僕の誕生日の前日だったんですね。んで「今度会うことがあれば誕生日プレゼントくれよー」なんてふざけて言つてたのを覚えていてくれてたそう。

なんでもやねん。もうたまんねーよ。

マサ・（後書き）

続きあります。

転機？（前書き）

ダメな男です。

しばらくして僕はその子を誘った。誕生日プレゼントのお礼にご飯でも、いちそじますって。すると快くOKの返事。やべーよ、嬉しそうる。婚約者がいるのにこの気持ち。あーダメダメ。そして待ち合わせ場所へ行くとそこにはもうあの子が。「今日仕事辞めたのつておい、そんな日に僕と食事してていいの?」「こんなものあるんだけど・・・」とその子が差し出したのは、怖いことで有名なお化け屋敷のチケット。僕は「よし!メシ喰う前に行こう!」と車を走らせた。

山道をグングンはしる。外は大雨。普通に怖い。そして閉店間際のさびれた遊園地。そこでお化け屋敷に入る。ツンケンしたいつものイメージとは違い、叫びまくる彼女。僕の手をしっかりと握り怯えている。落ちた、僕は完全に落ちた。結婚するのに、今更人を好きになつてどうするねん。バカですね、全く。

それから何度もデートした。もちろん婚約者とも会つてる。どっちつかず、ダメな僕。その子も「この人はもうすぐ結婚するんだから」という思いから軽い気持ちで遊び始めたのかも知れない。それがね、だんだんと彼女の方も僕が気になつてきたんでしょうね。誘われる回数も増えていき、誘つ回数も増えてきた。一股じゃん、僕。

人つてね、無理な状況や先のない状況で恋すると暴走するんだって。
だから不倫とかは燃えるんですよね。「私はダメなことしてゐる」「

僕は何をしてるんだ」そう思つてしまつ恋がいちばん熱くなるんですよ。誰だってそうでしょ？いけないことして、つて気持ちが導火線になる。婚約者がいて、僕は結婚する。その日が終わりの日。2人ともわかつてたし凄い燃えた。毎日乐しかつた。僕の心は完全にそつちに向いてしまつてた。年があけたら、2人で温泉に行こうとも決めた。それが最後に会う日つてのは2人ともわかつてた。

とはいえもうすぐ結婚。長い付き合いの婚約者もあらそかにできな。段取りも忙しくなつてくる。結婚式まであと二ヶ月。もし僕が本当に天才ならドラえもん作るのに。時間を戻すのに。そんな事ばっかり考えてた。長い付き合いの婚約者、そして僕にはもつたいないぐらいの女の子。おい神様、何の試練だよコレ。でも僕は親や婚約者の事を考えると裏切るなんて考えられなかつた。

そして大晦日。「最後の大晦日だから親と過ごす」と婚約者。バカな僕はあの子を誘つた。だつてもうすぐ会えなくなるんですから。その子も快くOKしてくれた。手を繋いでさ、初詣。本当に楽しかつたけど、除夜の鐘ききながら何か知らないけど涙が出てきた。自分のいい加減さ、そしてもうすぐこの子に会えなくなる寂しさ。そして家で待つている婚約者。

子供の頃からいい加減で中途半端な僕。結婚しようと決めてこの有様。女性が苦手で、遊びで捨てるなんて考えられない。女の子にはまつすぐ向き合つてきた。昔からそうなんです、別れつてできなんです。僕のことを好きでいてくれてるこの子と別れるなんて考えられなかつた。でもね、もうすぐ離れるんですよ。タイムリミットが来たら。

そんな大晦日の夜、僕は倒れた。なんやねん。

転機？（後書き）

続きあるんですけど・・・。

別れ？（前書き）

長いね、この話。

別れ？

大晦日、つてか元旦に緊急入院。持病であつた椎間板ヘルニア。くだらない恋の悩みで疲れ切つていた体と心。そしてインフルエンザ。無理して夜中に初詣なんか行つたからかな。彼女を「なんか体の具合が悪い」と早めに送り届け、自宅に帰つたらそのまま倒れた。正月の朝一から救急車。だつて歩けなかつたんだもん。腰が痛くて車いすにさえ座れない。インフルエンザで声も出ない。熱は40度近く出ている。そして知らないうちに悩んで激減していた体重。バカですよね、僕。

病院に着くとすぐに処置。元旦ですよ？元旦。バカでかい注射を何本も打たれ強制的に熱を下げる。動かなくなつた腰には神経ブロック注射を打たれ、そして機械で引っ張られる。痛すぎて涙もない。声も出ないし。「一週間は大人しくしていてもらいます」だつてさ。つておい！僕は4日から温泉旅行なんだよ。マジかよ、絶望的じやん。あーあ。二股なんてしてるからこんな目にあつんだ。自分が悪いんだ。

僕は2人にメールした。婚約者とあの子に。

婚約者が来た。怒りながら「こんな大事な時期に何してるん？早く治してよ！」と怒られた。おいおい、病気だつーの。婚約者は「これでも読んで勉強しなさい」とゼクシィ置いていった。なんやねん・・・優しくしてくれよ。声がない僕はただうなづくだけだった。

そしてその後、あの子が来た。泣きながら「私と無理して昨日遊んだから・・・と泣いている。たくさんの雑誌を抱え、「どんな本が

好きかわからないから・・・だつてさ。温泉なんてキャンセルした
らしいから早く元気になつてね、だつてさ。声が出ない僕は何も言
えず、ここで初めて泣いた。痛いとかじやなく、人の優しさに触れ
て泣いた。

中学生の時。校舎の影で僕を元気づけてくれた女の子。初めての恋
だつたけどはつきりと覚えてる。その時と同じ気持ちが僕に沸いて
きた。

動けない僕、声が出ない僕。ただ泣くしか出来なかつた。彼女は「
私が長居したら迷惑かかるから、行くね」と行つて出て行つた。歩
くことすら出来ない、声もでない僕。ただ見送る事しか出来なかつ
た。

僕はその時決めた。婚約者に別れを告げようと。誰もいない病室で
ずっと泣いた。

なんでやねん、僕なんでやねん。

別れ？（後書き）

まだまだこれから。

ウソ? (謊う)

うーん。

ウソ？

僕は一週間入院を告げられていたが、翌日の2日目の日に病院を逃亡した。つても勝手に退院したんやけどね。「もう治った。俺すげー」なんて医者に言つてね。だって温泉行かなきゃだめだもんね。熱が下がつたのと神経注射が効いたのか、どうにか歩けるようになつた。この時は本気で奇跡だと思ったよ。だって歩けなかつたんですよ？歩かなかつた、じゃなくて歩けなかつた。腰が激しく痛み、動くことすら出来なかつた。

でも翌日に不思議と歩けるようになつてた。体がどうこうじゃなく、旅行の事ばかり考えてた。すぐに彼女にメールし、「旅行は行くぞ」と告げた。声はまだ出なかつたけど。家に帰ると親に凄く怒鳴られた。だってそうですよね？一週間入院つて言われてるのに勝手に退院し、んですぐ旅行に行くだつて。そりや怒るでしょ。でも僕は振り切つて旅行に向かつた。

声は相変わらず出なかつた。車の中で筆談しながら会話。二日前まで動けなかつた奴が運転して旅行ですよ？考えられないってか凄いよね。「俺、どれだけこの子が好きなんやろ」そんなことばっかり考えてた。旅行中、彼女は声のない僕の変わりをずっとしてくれた。まあ当たり前だけどね。恋にボケてたらそんなことも嬉しいんだよね。

たつた一泊だけど、楽しかつた。普通に歩けるようになつてたし、熱も下がつてた。一緒に露天風呂入つたり、夜中まで飲んだり。ホントは「婚約者と別れる」って考え方をおうと思つてたけど、それはその子の気持ちを考えてやめておいた。だってそうでしょ？いきなり別れるから付き合つてくれ、って言われたら誰だつて戸惑うと

思うんです。だから彼女はこの旅行中、「もうこれで最後かもね」と思つてたと思う。

よく我慢したよ、僕。「今すぐでもこの子と」なんて気持ちを伝えたつた。でもね、やり残したことあるから言えなかつた。婚約者のこと。まあ普通そうですよね、先に片付けなきゃいけないことがるからね。高校からずっと一緒にいた婚約者。僕の一番の理解者であり、恋人だった。中途半端な性格で、いつも逃げてばかりだった僕にできるのかな。別れつて。

なんでやねん、本当にいいの？

ウン？（後書き）

続きもヨロシク

ヒビリ（湿潤化）

ナガリ。

そしてしばらく悩み続けた。今思い出そうとしても中々思い出せないが、もう凄く苦しんだ。親の顔が見れなかつた。もちろん婚約者の顔も。ダラダラと何も出来ず時間だけが流れしていく。男のくせにメソメソして、そして瘦せていく。そして結婚式まで1ヶ月を切つた。あのとき病室で本気で決めた決断。僕は結婚をやめる。それがまた揺らいでた。ほんとダメな奴。いつもそう、後悔ばかり。

でもこの時初めて僕は男になつた。婚約者を呼び出し「結婚できない」と告げた。呆然とする婚約者。「何ゆうてんの?」ってな感じ。そらそうでしょ。でも僕は言い訳とかしなかつた。本当の事を告げた。

「好きな人がいる」

崩れ落ちる婚約者。それを見る僕。人生で一番辛い瞬間だったかもしれない。

女性にコンプレックスを持ち、中途半端で女性に意見したりすることができなかつた僕。生まれて初めて恋愛という感情の中で、自分を主張した。もうどうしようもないくらい泣き叫ぶ婚約者。僕はまた自分を責めだした。でも、でも初めて自分に素直になろうとしたんだ。別れであろうと付き合いであろうと、自分の心の意見を口にする事ができたんだ。ここは自分を信じて乗り越えなきや。そう思つた。

そして僕はそのまま婚約者の親の所へ行き、全てを告げた。当然相手の親にも泣かれた。自分のわがままでこれだけ周りが悲しんだのは初めてかもしれない。でもここで止まっちゃダメなんです。自分は変わるんだ。そして中途半端な気持ちで別れを告げるなんて失礼じゃないか。その日のうちに式場や貸衣装屋、神社全てにキャンセ

ルを入れた。もう止まっちゃだめなんだ。止まれないんだ。

僕が別れたからって、あの子と一緒になるなんて保証はない。だつて言ってなかつたもん、こうするつて。温泉から帰つてからは連絡を取つてなかつたし。あの子はもう僕から離れ、誰かと新しい恋してゐかもしない。そんな不安もあつたけど、僕はまず婚約者に真実を告げる事を選んだ。間違いだらけで狂つた選択をしてるのはわかつてゐる。婚約者を捨てて浮氣相手の所に行くんだからね。

僕は最後に婚約者に「ありがとう」とだけ告げ、高校時代からの思い出を全て捨てた。

自分の親に全て話した。泣き叫び殴られた。僕はすごい苦しかつたよ。でもこれを乗り越えなけりや、本当に好きな物が手に入らないんだ。初めておこした自分からの行動。責任は重かつたが、中途半端な僕が少しだけ成長できたかもしれない。そんな気持ちが僕を支えた。そして数日後、僕はあの子に電話した。「俺、結婚辞めた。付き合つてほしい」つてね。彼女、驚いて声も出なかつた。恐らく自分を責めていたんだろう。「私のせいで・・・なんて思つてたのかもしれない。そして彼女の答えは保留のまま、翌日会つ約束をした。

しかしその日の内に、僕はまた倒れた。なんでやねん。

(後書き) ここに

続きもあります

入院？（前書き）

歌すがまますへ。

入院？

今度は長期入院決定。だつて歩けなかつたし。「一生歩けないままかもよ」なんて言われてさ。えー！人生の転機なのに。自分で行動して、そしてやつと決断できたのに。僕はある子に会う事もなく、遠い街の病院に入院した。だつて地元の病院じゃダメなんだ。遠くへ行つて考える時間が欲しかつた。急に会えなくなつたあの子には連絡した。「また入院！最悪！」ってな感じ。答えはまだ貰つてなかつた。

親も毎日来れるような場所ではなかつた。だから毎日一人。一応入院すると痛みも治まりなんとか歩けるようになつた。でも手術は決まつていたんです。だつていつまでもこんななんじやダメだからね。高校卒業後に始めたサッカーも楽しくなつてきた頃だつたし。もう一度歩けるようになつて、サッカーしたかつたし。それよりなにより、あの子と歩きたかつたし。もう一度サッカーできる、つて保証は無かつた。どころか歩けなくなる可能性つてのもあつた。

そんな時、病院にあの子がやつて來た。僕らの街から電車で一時間。わざわざ來てくれた。

彼女は「手術が終わつて退院したらどうかデート連れてつてね」とて言つてくれた。僕は泣いた。それが答えじゃん。歩けなくなるかもしれない僕に答えると頑張る気持ちをくれた。それから毎日のようになってくれた。僕もどんどん元気になつていく。手術は近づいてたけど、もうその頃は病院内の車いすチャンピオン。脳神経外科のセナ。勢いよく車いすを駆り、看護師さんに「俺の彼女。カワイイしょ！」なんて言つたりしてね。バカ丸出し。

よし、絶対歩けるようになつてやる。俺の人生コイツに賭けた！もう僕は中途半端なんかじゃない。目標ができたんだ。一緒に歩きたい人がいる。それだけの目標、夢だつたけど、僕が初めて自分で決めた夢。夢に小さいとか大きいなんてない。夢ってのは自分自身で見ることが、夢をみれることが素晴らしいんだ。

子供の頃から目標なしの夢なし甲斐性なし。そんな僕が嫌いだった。でもそんな僕を好きでいてくれる人がいる。今は自分が好きになる。だって、あの子の好きなものを僕が嫌いになれるわけないじゃん。

そして僕は手術の日を迎えた。なんでやねん、親こねえの？

入院？（後書き）

まだ続きます。死ぬまで。

あれ？（前書き）

「ハックジャック！」

あれ？

目が覚めた。まだ全身麻酔は効いたまま。なんか体に管を突っ込まれてゐるだけは覚えてる。麻酔で頭がボーッとしてる。ふと気付くとそこには母親が。「目が覚めたか？」こうでこの子誰？紹介してよ」と母親。母親の横にはあの子が立っていた。でもまだ麻酔が効きまくつてる僕。何を言つたか全く覚えてないし、起きたことすらわかつてない。あ、そや。手術したんだった。そんなことを考えてるうちに、僕はもう一度麻酔の眠りについた。

再び目を覚ました。いつたい今何時？手術はどうだったの？うーん。ふと気付くとそこにはまだ母親がいた。「あらおはよう。しかし麻酔つてす」いね。アンタ凄い喋つてたよ」え？覚えてないぞ。母親によると、麻酔が効いてる状態で一度目が覚めた時、僕は母にあの子の自慢をしまつくてたそうだ。

婚約解消のこと、あの子の存在。「死ぬほど好きやねん。オカン、いろいろごめんな」そう言つて寝たらしい。んであの子には「俺は歩けるぞ！大好きや！」と言つてたそだ。コラコラ、麻酔は白剤じゃねえぞ。むちやくちゃしやがるな、まったく。母親とあの子は麻酔ボケしてる僕に色々質問したらしい。酷いよね。するいよ。あの子はもう帰つていなかつたが、母親に「あんたしつかりしなさいよ。今度はね」と言われた。オカン、ありがとう。色々悪かつたね。

そして僕はその田の中に再び歩けるようになった。まだ痛みはあつたけど、手術は完璧だつたそだ。マジ？先生、プラックジャックかよ…その田の中に歩けるなんて！「鍛えようによつてはバスケもサッカーもできるよ」だつてわ。おいおいそんなことどうでもいいいつ

て。デートできるじやん！僕生まれ変われるよ。全てリセット。これからスタート。中途半端はもついたらない。僕は中途半端な僕と愛用の車いすセナ号に別れを告げた。

そして地獄のリハビリ。相変わらずあの子はよく来てくれる。「なああ、もう一回麻酔しないの？」だつてさ。もっと聞きたいことがあるらしい。つてだから自白剤じゃないっての。麻酔なんか使わなくて何回でも言えるつて、「好き」ぐらい。聞かれなくても言い続けてやるつて。僕はモリモリ食べて、ガンガン鍛えた。病室に飾つてあるサッカーのユニフォーム。もう一度袖をとおせるんですよ。そしてあの子の写真。もう過去は振り切つた。僕には彼女がいる。

相変わらず友達とかは中々来てくれなかつた。だつて遠いからね。逃げるように入院したから。婚約者を裏切つたことで僕地元じゃ悪人だし。でもね、あの子が来てくれるだけで幸せだった。来ない日なんてもうたまらなく寂しかつた。部屋に飾つてあるあの子の写真だけを見て二二二二してた。おいおい、ハマりすぎ？ 看護師さんに「好きでたまらないんですね」なんて言われてさ。「じゃこれはいらないね」ってエロ本捨てられた。それとこれとは話が違うけどね。うん、彼女が好きなんです。それだけは恥ずかしげもなく堂々とい張つた。ウザイよね、こいつら奴。

運命の出会いってみんな口にするよね。それって何？ 僕にはわからない。女の人の気持ちは相変わらずわからない。運命ってなんだ？ 以前の婚約者と彼女が同じ誕生日だったこととか？ 僕と彼女の誕生日が10日違いで生まれた病院が一緒だった事とか？ 何でも運命つてまとめてしまつたけど、そんなことで運命つて片付けられないよね。でもそのときは本気でこの出会いは運命の出会いだ、なんて

思つてた。

そんな時病院に思わぬ人があ見舞いに来てくれた。なんでやねん、
なんで知ってるの？

あれ？（後書き）

続けたいと思います

聞合？（前書き）

ふー。

再会？

病室に数人の友人がやつてきた。高校時代の友達。卒業から数年会つてない奴もいる。「あれ、なんで知ってるん?」ってな感じ。「何でもしつてるぞ。お前が結婚から逃げた事もな」「あら、もう地元じゃ噂なんやね。そしてその友人達に混ざり、僕の大好きだったあの子が。中学の時から思い続け、結局片思いで終わつたあの子。

全然変わつてない。ってかさらには磨きがかかつてキレイになつてる。「相変わらずムチャしてるね。結婚やめたんだって?」「そんなこと言われてしまつた。あー、穴があつたら入りたい。そんなことを考えながら、僕は病室の台の上にある写真立てをこつそり伏せた。なんでだろ。この子に見られたくなかったんかな。恥ずかしかつたんかな。結婚やめたのにもう彼女が・・・ってのがバレるのがイヤだつたのかな。

しばらく世間話した。みんな今どうしてるのか?そんなくだらない話。もちろん高校の仲間なので、僕の元婚約者の事も知つてゐる。でもその話題には触れなかつた。気を遣つてるんだろうね。うーん。そしてしばらくした時、あの子が写真立てに気づき、僕の隙を見て写真を見た。「えー!これ新しい彼女?やるねー!」だって。うわー、マジ勘弁。見ないで。って僕は何を言つてるんやろ。まだよ。

見られて何が悪い?つてかこの子には高校の時振られてるんだぜ?あ、振られた訳じゃないか。でも全然他人じゃん。相変わらず僕の大好きな女性だけど、もう関係ないじゃん。中途半端な自分にはお別れしたはず。いつまでこの子の氣を引こうとしてるんだろ、僕。

「そりやねん。超カワイイやろー新しい彼女やねん。」やつと言えた。また一つ過去を振り切った。「えー。早い。」だつてこの前別れたばかりなのに。「だつてさ。そりやこの子と僕の元婚約者は同級生、てか知り合いだしね。でも、新しい彼女の存在を明かすことによつて、また一つ僕は成長出来た気がする。初恋の人、そして元彼女。それと決別できた。かな？」

人間は過去を引きずつたままじゃ成長出来ないって人は言う。でもそれは違うと思う。過去を認め、そしていつも心にそれを留めそして成長するんだと僕は思う。振り向いちゃいけない。前を向かなきゃいけない。そんな事はわかつてゐる。人間つて、過去は振り向かないように出来るつて知つてました?だつて首が180度回る人つていなでしょ。振り返る時は胸も後ろ向く。振り返るつとすると、もう後ろ向けに歩いてしまうんですよ。

「別れたって聞いたから、狙おつと思つてたのにー。」だつて。つてコラーー!なんでやねん。

再会？（後書き）

まだまだ続きますね。

幸せ? (前書き)

うーん、女心。

幸せ？

数週間後、僕は退院した。体重は凄く減つたけどなんか満たされた気分。まだ走つたりはできないけど、まっすぐ歩くことは出来る。退院の時は彼女が付き添つてくれた。だってまだフラフラしか歩けないからね。車の運転も出来るようになつた。もう少し経てば、元に戻れると思う。

それから。ずっと幸せだった。本当に心から好きだと言えた。全然恥ずかしくない。もう頭の中が彼女で一杯。仕事中も寝るときも。彼女の事で頭が一杯。

彼女だつてそう。今まで相当男に苦労したらしく、こんな一途な僕に夢中になつてくれた。「こんな人初めて」だそう。嬉しいね。本当は女性に優しくするしかできないだけなのに。でもそれが良かつたのかもしないね。楽しい会話に楽しいデート。色々な所に行つたし、色んなモノを2人で見てきた。彼女の職場まで毎日迎えに行き、ただ送つて行くだけの数十分。その車内が僕を満たし、彼女を満たした。

彼女といふと、様々な「キセキ」っぽい事も起きる。绝望的な状況から救われた事もあつた。病気も彼女をみると治る気がした。毎日が本当に短い。樂しそぎてたまらない。食べるもの、見るもの聴くもの着るもの。全てが合う気がした。2人とももうこの人しかいない、そう思つてた。結婚するならこの人！お互い決めてた。

誰だつてそうだよね。付き合いたての頃は本当に楽しい。だって付き合いたてから「ここが合わない」なんて思つてたらダメなんですよ。そして好きだつたら自然とお互い歩み寄り、嫌いなモノが好き

なモノへ、自然と2人の目線が合っていくもの。合わなければそれは本当に全て好きじゃないのかも知れないし、相手の事よりも自分の事だけを考えてるのかも知れない。

でもね、やっぱ思った事。僕は特殊な人間なんだって。コンプレックスから抜け出せない、女性に対して優しくすることしか出来ない。そんな人間なんだって。いつかそういう日が来るとは思つてたけど、やっぱり来たね。

なんでやねん、なぜダメになるの？僕たち。

幸せ？（後書き）

さてさて。続きます。

別れの予感？（前書き）

うーんうーん。

別れの予感？

彼女には重荷だったのかも。一途すぎて鬱陶しかったのかも。僕はあの時決意して、中途半端な自分にお別れを告げそして彼女の為に尽くそうと決めていた。だってさ、こんな僕が婚約解消という最悪の状態で女性を泣かし、1人の女性の夢を壊してしまった事があるんだよ。もう誰も泣かせたくない、こんなくだらない男のために女性を苦しめたくない。そう決意したんだよ。

彼女は口もきかなくなっていた。彼女は彼女なりに悩んでいたんだろ。僕はそんなことダメだとわかっているんだが、必死になつてしまつた。たくさんメールし会いに行きそして説得した。でもダメだった。半ば鬱状態。彼女も苦しんだのだろう。元々飽きっぽくてワンマンな彼女。ついに来たかな、僕がフランれる日が。

でも誠意が通じたのか、彼女は数日で元通りになる事が多かつた。そしてまたいつも通り中のいい2人に戻る。しかしながら彼女は鬱状態になる。でも彼女は決して鬱病なんかじゃない。だって彼女が黙り込むのは僕の前だけなんだから。一途に思い込む僕が彼女には重たかったのかもしれない。でも僕はこういう人間なんだ。自分から女性に別れることなんて言えない男。優しくすることしか出来ない男。中途半端とサヨナラし、自分の決意を最後まで貫こうと決めた男。

人ってね、無理な状況や先のない状況で恋すると暴走するんだって。そしてね、その恋は冷めるのも早いんだって。

無理とわかってる、先のない恋愛は凄く楽しく悲しくそして燃え上がる。しかし、それが手に入ってしまうと冷めるのも早い。人は欲しい物があると頑張れるもの。でも手に入るといつしかその事は忘れ、また違うものが欲しくなる。そんな生き物。そんな悲しい生き物。

あーあ、この子も同じなんだ。普通の子なんだ。でも僕は違う。全てを捨てて手に入れた幸せ。もう離したくない。やるだけの事をやつてもまだ足りない。結局自分を責めた。彼女から離れていくのは自分のせいだと自分を責めた。相変わらずダメな男。昔の自分に戻つていくのがわかる。

僕は頑張った。何度彼女の心が離れても諦めなかつた。諦める？何それ。僕にはそんな言葉はない。諦めかけたとき、いつも思い出す。中学の時かけて貰つた声、初恋の人の優しい言葉。「もういいよ！」と言えば簡単に終われる。でも諦めない。もう諦めない。

なんでもやねん、この気持ち届けよ。

別れの予感？（後書き）

あと少しかな。

ナラタジ? (前書き)

それとも終わるかな。

サヨナラ？

そんな事を繰り返し、僕は何度も捨てられた。1週間、1ヶ月。僕は捨てられるたびに努力し、元通りになつた。彼女も自分のメンタルの弱さをいつも謝るが、そんなことどうでもいい。もう鬱状態には僕がさせない。彼女は言う。いつも悪いのは自分だと。いやちがうよ、僕がしっかりしてないから悪いんだ。

僕はやっぱりどこかいつも中途半端。彼女の事だけを考えて努力してたけど、それ以外の事が中途半端だつたかもしない。仕事や金銭感覚、生活態度。将来の事が見え隠れする彼女には、それが不安だつたのかも知れない。僕は本当に努力していたのか？彼女に対する自分だけを磨き、「本当の自分」を磨き忘れてはいなか？今だから言えるけど、その時は何も気付かなかつたし、わからなかつた。

いつしか捨てられる回数と期間が増えた。「捨てられる」って表現はオカシイかもしないけど、そういうことなんだ。将来に不安を感じ、そしてダメと言われている。そういうことなんだ。彼女は裕福な家の出身。末っ子のお嬢さん。僕は貧乏生まれの長男坊。親は努力でのし上がつた一代目。今でこそ裕福ではあるが、それは大変な苦労をしてきたのを僕は見ていく。

僕の夢。この頃には「彼女との楽しい家庭が欲しい」に変わつた。相変わらず小さい夢。仕事とかそんなことどうでも良かつた。もちろんお金持ちになりたいけど、彼女がいなけりや意味がない。彼女の為に働き、彼女の為に側にいる。あまり格好よくはないけれど、これが僕なんだ。欲しいものは彼女が欲しがるもの。全ては彼女。うーん、うまくコントロールされてたのかな？

彼女と会いそして一緒に過ごす。毎日顔を見に行つた。毎日メールした。そして捨てられてはまた付き合つ。そんな繰り返し。僕から離れた事は一度もない。常に僕は彼女の事を思い続けていた。だってそうじやん、それしかできないもん。

そして付き合いだして8年。僕は33歳になつて、完全にサヨナラを告げられた。なんでやねん。

ナラタジ? (後書き)

続きます

新し道? (前書き)

フタねひやこました。

新しき道？

なんか抜け殻。だつてもう彼女しかなかつたから。しつこく電話やメールもしたが、いつしか「そんなことしても余計嫌われるだけ」つて気付いた。無気力、鬱状態。仕事も手につかず、酒に逃げる事もしばしば。荒れた生活、夢も何もない。ただフラれただけなのに。

友達には「女なんて星の数だけいる」と言っていたが、僕には賭けているものが違つた。1人の女性の人生や夢を壊し、そして手に入れた人、幸せ。なんでそれを守る事が出来なかつたのだろう。たかがフラれただけ、と言えばそれまでなんだ。でもね、コンプレックスや女性に対する気持ちを全て変えてくれた人。僕に自信というものを植え付けてくれた人。

そして彼女と別れることによって、僕はまた昔の自分に戻つていった。女性恐怖症？みたいな感じ。たくさんの女性と知り合つたが、全然ダメ。元カノへの未練とかそんなんじゃなく、もおう中途半端な弱虫に戻つてしまつた。「時間が経てば大丈夫」そう言われてたが、何も変わらなかつた。

そんな時、ある人と出会つた。こんな僕を慕つてくれれる、素敵な女性。やつと彼女の事を振り切れる、そんな思いが頭をよぎつた。その子は尽くしてくれた。ダメダメな僕を支えてくれたし、僕もそれに精一杯答えようとしたんだ。そして知らず知らずのうちに半年が経つた。

もう僕の頭の中には過去のことはなかつた。そう思つてた。

フラれた人を前にして、あなたは何と声をかけますか？「またいい人見つかるよ」「君なら大丈夫」普通はこう言いますよね。確かにそのとうりです。でもね、見つけたいのはいい人じゃない。思い出を越えられる人、新しい自分を作ってくれる人。

過去を引きずるのはダメ、と人は言うがそれはそれでいいと思う。引きずつたらいつかは磨り減る。引きずり回して、無くなるまで磨り減らせばいい。そうすれば、自分が鍛えられてまた新しい何かを引っ張れるのだから。

僕は少しだけ幸せになりそうな気がしてた。

でもそんなにうまくはいかなにな。なんでやねん、どうなる僕。 3
歳。

新しき道? (後書き)

もつすべ終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944e/>

なんでやねん

2010年10月10日05時27分発行